NEWS

【第 78 回ダンス・ワーク・セミナー】
2017.8.18（金）,19（土）@総合体育館多目的ホール　他
※このセミナーで試験対策となるソロ作品の作り方を教授します。

【第 70 回全国中学校・高等学校ダンスコンクール】
2017.11.23（木・祝）@メルパルク TOKYO

【3 年生パフォーマンス】
2017.11.26（日）@総合体育館多目的ホール

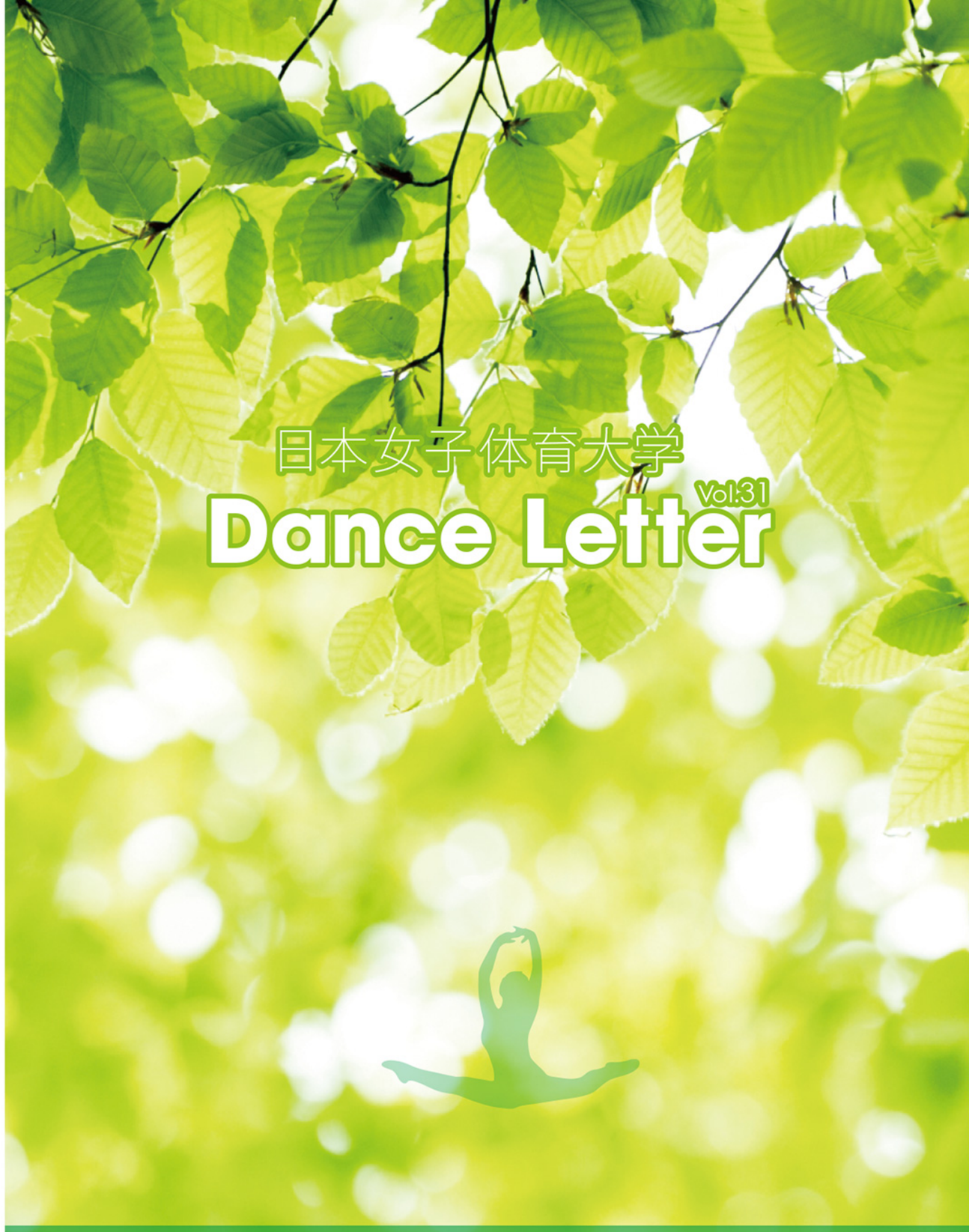
【第 16 回舞踊学専攻卒業公演】
2018.1.23（火）@府中の森芸術劇場　どりーむホール

【SHOWCASE】
2017 夏　2017.7.16（日）@総合体育館多目的ホール

発行
〒157-8565　東京都世田谷区北烏山8-19-1
日本女子体育大学　運動科学科　舞踊学専攻

発行日：2017年6月11日

http://www.jwcpe.ac.jp/



日本女子体育大学
Dance Letter
Vol.31

http://www.jwcpe.ac.jp/

Dance Letter Vol.31

3年生パフォーマンス

須田　侑花（4年）小山研究室

3年生パフォーマンスで振付をするにあたって、コンセプトを考える際に、普段のレッスン風景を作品にしたら面白そうだなと思いました。そこで、舞台では見せることのないバレエのレッスンとリハーサル風景を、あえて作品にすることに挑戦しました。制作過程で難しかった点は、レッスンやリハーサルを本番の舞台でどのように踊るかを考えることです。踊っている時の表情や踊り方など、それぞれが普段のレッスンで意識していることなどを話し合って作っていきました。本番間近になり、全員の気持ちが一つになって踊ることができなくなっていた時もありましたが、それを乗り越え、研究室の団結力も強くなり、本番は全員の気持ちが一つにまとまって踊ることができました。

田山　由佳（4年）坂本研究室

私は今回の3年生パフォーマンスで振付をやらせていただきました。今年の坂本研究室は人数が多い上に、3年生ということでレッスン等で個々に忙しく、なかなか練習に人が集まらず大変な面もありました。また、私たちの代の坂本研究室には様々なジャンルの人がいるので、ジャンルを一つに寄せすぎず、一人一人の良さが出るような、でも坂本研究室らしさも残った作品にしようということで、振付者3人で話し合いを繰り返しました。このように、同い年の仲間と作品を作り上げていく機会はなかなか無いもので、同い年故の甘えだったり、言いづらさもあったりして、普段の作品作りとはまた違った苦労や葛藤がありました。ですが、結果的には色々な方に良かったと言ってもらえる作品になって、本当に頑張って良かったと思いますし、坂本研究室のみんなにも、指導して下さった坂本先生と助手の栗屋さんにも感謝しています。過程はどうであれ、終わってみると、振付をしたことも、坂本研究室を選んだことも良かったと思えます。本番後の達成感は次の作品に向けてのパワーにもなりますし、この調子で卒業公演に向けてみんなで頑張っていきたいです。卒業公演では、また違った坂本研究室を見せられたらいいなと思います。

青沼　沙季（4年）高野研究室

大きなテーマは『クニ』でした。私たちにしか分からないルールの中で生きているということで、皆さんには内緒ですが、細かいルールを定めました。それに従ってこの生き物の生態をみせたり、工場で働いてみたり、ちょっと部屋を覗いてみたら話をしていたり、というようなシーンが生まれました。その後、題名をつけました。ちょうどアメリカ大統領がトランプ氏に決まった頃です。『サメみたいに見た目に牙があって返り血で真っ赤なヒレがあれば殺人鬼だってわかるけど、本当はそうじゃないやつがいるんだよ。』この題名がついてからこの『クニ』が社会化しました。急に明るくなる照明、おそろいの生地を使っていてもひとりひとり違うデザインの衣装などフワフワしていたものが繋がって意味づけされました。私たちは作品作りの前に幾度もインプロヴィゼーションやワークショップをしました。その中で15人それぞれが独自に放つ空気を持ち合わせていることが分かりワクワクし、同時にそれは各々自分への緊張感も生みました。作品のピース集めは勿論のこと、この常に張り詰める独特な緊張感こそ、この作品に大きく生きたと感じます。

秋山　真衣(4年)松山研究室

3年生になり各自所属したい研究室に所属し様々なことを極めていくことになり1.2年生とは違う環境になりました。そして3年生のメインの舞台が3年生パフォーマンスでした。今回は8人という人数での舞台、そしてこのメンバーでは初めての舞台だったので本当にたくさんの壁にぶつかったと感じています。初めは振付を担当していなかったのですが、1週間前になり全て作り直すことになり、少し担当させてもらいました。時間もなく焦りがほとんどでしたが、なんとかみんなの力でまとめることができたと思っています。あれは違う、もっとこうしたい、こうしたらどう、など一人一人の意見を参考にしていきながら、時間が少ない中でもゲネまで模索して、最終的にはみんなが納得できるようなものができました。今回の3年生パフォーマンスを通して、得たものは人それぞれ違うかもしれませんがたくさんあります。人がいる分、意見があり考えがあるのでぶつかり合うこともありました。でもそれが自分の考えとは違うことでまた自分の中の知識や考え方のボキャブラリーも増えます。松山先生が、「研究室なんだから研究し続けなさい」とおっしゃって下さったように、今後も研究室の仲間たちと研究し続けて成長していきたいです。そしていつも支えてくれている家族や仲間、指導をして下さる先生方にはたくさんの感謝を送り続けたいです。

武田　摩耶（大学院1年）院生

やわらかな風に包まれ、桜の咲き誇るこの春に、私は日本女子体育大学大学院に進学しました。日本女子体育大学大学院の院生としてこの2年間、恥じることのないよう、同期と共に、切磋琢磨しながら研究に励んで行きたいという思いを今とても感じています。

私が大学院への進学を考え始めたのは、学部の2年生で履修した生涯ダンス論という授業内で鑑賞した映像がきっかけでした。そこから、ダンスには様々な可能性が秘められていると感じ、また、自分自身がダンスと実際に関わって行く中でも実感したことから、更に深く広い知識を身に付け、研究していきたいという気持ちが大きくなり、大学院の受験を決めました。

私自身、将来は特別支援学校で働きたいという夢があり、最終的には、大学院で学んだことを学校教育の現場で活かして行きたいと考えています。この恵まれた環境と設備の中で、仲間と共に真摯に勉学に励み、大学院生活が実りあるものとなるよう努力していきたいです。

編集後記

青柳　万智子・石木　陽菜（3年）

最後までご覧頂き有難うございます。

今年度ダンスレターの編集担当になりました、3年青柳と石木です。ダンスレターを通じてニチジョでの様々なことを発信していきたいと思います。精一杯務めさせて頂きますので、今後とも宜しくお願い致します。

ワークショップ

越戸　茜（3年）YOSHIEワークショップ

私はYOSHIEさんの所属しているダンスチームやYOSHIEさんのダンスのかっこよさは中学生のころから知っていました。観ている人を魅了させる表現力があり、高いスキルの中にパッションがあるダンサーです。私自身なかなかレッスンやWSを受ける機会がなく、今回YOSHIEさんが日女に来て下さって本当に嬉しかったです。WSでは基礎的なことからリズムに合わせたルーティン、音楽に合わせたフリなどをやりました。今までやったことのなかった音のとり方や、音の感じ方を教えていただけて勉強になりました。3時間のWSは一瞬で終わってしまいましたが自分の中で失われかけていた「踊りを純粋に楽しむ気持ち」がYOSHIEさんのWSを通じてとても強くなりました。さらに、YOSHIEさんの踊りを見たときは鳥肌が立つほどかっこよくて、踊りで空気が変わる瞬間を感じられました。WS後にはYOSHIEさんのダンスに対する熱い想いが聞けて、自分もたくさん努力して、YOSHIEさんのような表現者になれるように頑張ろうと思えました。WSで踊りだけではなく、踊りに対することまで深く考えさせられる経験はとても貴重でした。私はこのWSで学んだことを大学生活に活かし、もっとスキルアップし、何より踊りを好きでいる気持ちを大事にしていこうと思いました。

尾上　実梨（2年）Philippe Decouflé CONTACTワークショップ

昨年、10月26日にフィリップ・ドゥクフレ「コンタクト」のWSが開かれました。このWSでは、10人程のグループになり、1人ずつ順番に日常生活の中のポーズをとっていき、全員で一つのピクチャーを作る作業や、また、「コンタクト」に実際に出てくる少しのフレーズを踊りました。

皆で一つのピクチャーを作るときには、私にはありきたりなポーズしか浮かばず、他のWS受講者を見ると面白い日常のポーズがありました。特に面白かったのは、コンタクトレンズをつけるポーズをとった人がいて、私はコンタクトを普段つけないので、自分には浮かばないものだと感じ、経験の違いによってアイデアの幅も全く違ってくるんだと思いました。

「コンタクト」の一部を踊った時は自然な動きの難しさを感じました。振付家の動きと言葉をどちらとも理解し、それを素直に受け取らなければ、自分勝手なアクセントがついてしまったり、求められている自然な動きにはならなくなってしまいます。自分にある余計なクセや固定概念を捨てて、素直で柔軟な頭と身体で振り付けを踊ることができる人がダンサーとしてのびていくのだと感じました。

フィリップ・ドゥクフレは、とてもユニークで美しい世界観の舞台を作る素晴らしいコレオグラファーだと思います。講師で来てくださったアレックスさんに何故フィリップ・ドゥクフレのもとで踊りたいと思ったのかと聞いたら、「彼が好きだから」と一言伝えてくださいました。コレオグラファーも素敵で、そのコレオグラファーの個性や世界観を伝えられる素敵なダンサーのWSを受けられたとても幸せな時間でした。

部活動

安田　夏菜（3年）　ダンスプロデュース研究部（自主公演）

ダンス・プロデュース研究部では学生が「制作・振付・出演」をする自主公演を毎年都内の劇場を借りて行なっています。今回私は制作サブとして関わらせていただきました。今年は青山DDDクロスシアターを使用しての初めての公演だったため、全てが例年とは違いスタッフや先生との協力がとても必要とされました。すべてが完璧とはいえないものの、新しい場での最初の公演として無事成功で終えることができました。

普段は出演者として舞台に立つことのほうが多いため、チラシの手折り込みやリストの作成、他団体との連絡など制作サブすべての行動が勉強になり、とても貴重な体験ができたと思います。出演者の募集からオーディションやリハーサル等の長い期間、一番近い位置から日々励むダンサーたちを見てきたため公演終了後の達成感は出演者と同じくらいおおきなものでした。

どのような形であれ、舞台に携わるということは皆が同じ熱意を持ち、気持ちが一つになる素敵なものだと今回制作サブを通して再確認することができました。必ず成功の裏には失敗があり、努力があります。それを身をもって学ぶことのできたこの機会に感謝したいと思います。

大塚 琴絵（4年）ソングリーディング部

私たちソングリーディング部GRINSは昨年11月19日に行われたALL JAPAN CHEER DANCE CHAMPIONSHIP 2016(第16回全日本チアダンス選手権大会)に出場し、POM部門において1位およびグランプリ、3月28日に行われたUSA School & College Nationals 2017では、JAZZ部門、POM部門の両部門において1位、またJAZZ部門におきましてはグランプリを獲得することができました。

先生、コーチ方のご指導の下、応援してくださる全ての方に支えられ、それが私たちのパワーとなり、このような賞を獲得することができたこと、この競技に全力で向き合える環境に感謝の気持でいっぱいです。

輝かしい結果の道のりには幾つもの困難がありましたが今いる仲間たちと手を取り合い諦めずに挑戦し続けてきてよかったと昨年の１年間を通して心から感じております。

4月27日からアメリカフロリダ州で行われる2017 WORLD CHEERLEADING CHAMPIONSHIPSに日本代表として出場します。

これからが本当のスタートです。今年も新たな目標に向かって貪欲に挑戦し続けていきます。

皆様の応援を胸に、多くの方に笑顔と感動を届けられるようチーム一丸となり全力で駆け抜けて参りますので今年も宜しくお願い致します。

川口　なつみ（4年）　舞踊部（発表会）

昨年12月11日に、第18回舞踊部発表会を開催しました。私たちの発表会は自分たちで自由に作品を創作し、1人で、あるいは仲間と踊ったり、相手に振り付けたりと、自分が今まで突き詰めて踊ってきたジャンルや、またはずっと興味のあったジャンルの作品に挑戦したりと、単なる発表だけではなく、ダンサーとしての学び、成長の場にもなっています。昨年度は部員数126名と、これまで以上に活動が活発に盛り上がり、発表会も満員御礼、とても嬉しく思っています。私は主将を務めさせて頂き、この一年間で沢山のことを学ぶことができました。

舞踊部発表会は、舞台監督や照明、運営など全て、ダンスプロデュース研究部さんやモダンダンス部さん協力の下、開催することができています。私たちの舞台をより良いものにしようとたくさん工夫して努力してくれている姿を目の当たりにし、今までも分かっていたつもりでしたが、本当にたくさんの方々の協力があってこそ、私たちが踊ることができ、素敵な舞台が出来上がるんだと、改めて痛感しました。主将としての経験は絶対に将来に生かしていきたいと思います。

発表会に関わってくださった全ての方々に感謝し、これからも日々切磋琢磨し精進して参りますので、応援のほどよろしくお願い致します。

外部活動

宮嶋　かな子（3年）SAKURA

昨年2月にオーディション、5月・6月にトライアル公演を経て、9月より明治座で幕を開けた『SAKURA -JAPAN IN THE BOX-』。私はパフォーマーとして全ての公演、93公演に出演させて頂きました。この作品は2020年の東京オリンピックに向けて、外国人のお客様向けの「新しい夜のエンターテインメント」を目指して始まったものです。そのため、言葉に頼らない表現方法で、日本の四季と共に移ろう主人公サクラの心を70分で表現するという、「ジェットコース型エンターテインメント」と称されていました。また、日本舞踊や和楽器などの伝統芸能とダンス、更にスマホアプリと舞台が連動するという最新技術が融合した、まさに「新しい」舞台でした。私はパフォーマー最年少ながら、殺陣のシーンリーダーを務めました。学校に通いながら長期公演に出演し続けることは決して容易ではありませんでしたが、たくさんの方々のご支援のもと全ての公演をこなし、演じ切ることができました。この舞台に携わらせて頂けたことは、私の一生の宝となると思います。そして明治座という伝統ある舞台に立たせて頂いたこと、深く感謝しております。この経験を糧に、これからも様々なことに積極的に挑戦していきたいです。

新入生の言葉

上村　世奈（1年）A1クラス

憧れだった日本女子体育大学に入学して約２週間が経ちました。まだ２週間で慣れないことも多いですが、すでにこの大学を選んでよかったと感じられるような楽しい大学生活を過ごしています。

Ａ１クラスは色々なジャンルのダンサーが集まっていたり地方組が多かったりと、とても個性豊かで賑やかなクラスです。

私は幼い頃からダンスを始め、今までに色んなジャンルに触れてきました。その中で先生に習うだけではなく自分で作品を作ったり、人に教える立場も経験したことで、ダンスを仕事にしたいという昔からの夢がより明確になり日女へ入学しました。

日女の実技授業では今まで自分が向き合ってこなかったジャンルに挑戦できたり、間違った動かし方をしていたのだと新しい発見と刺激が多くとても充実しています。講義も高校とは違って、すべてが自分のダンスに繋がる内容ばかりで勉強が嫌いだった私も以前より積極的に授業に参加できています!

今憧れていた日女生となり、同じような夢や目標を持った仲間に出会えて、一人一人から毎日刺激を受けてそんな仲間と夢を追える最高の環境に自分がいられることに感謝して４年間でたくさんのことを吸収し、自分にしかできないダンスを追求し夢を叶えていきたいと思います。

兼平　普（1年）A2クラス

日本女子体育大学に入学してから2週間が経ちました。まだまだ不安なことはありますが少しずつ色々なことに慣れ、教室にも迷子にならずにたどり着けるようになりました。

大好きな踊りを個性豊かで素敵な仲間たちと学べてすごく充実した毎日を過ごしています。自分が今までやってこなかったジャンルのダンスはもちろん、座学では体の仕組みも勉強するので、より深く踊りを吸収することができます。また、色々なジャンルのダンスを踊ってきた子たちが集まるので授業のたびに刺激を受け、もっと頑張ろうという気持ちがふつふつと沸いてきます。

私は入学前に何度か発表会を見に行っていたモダンダンス部に入部したのですが、先輩方の踊りを見るたびに尊敬するところがたくさんあり同学年で受けている授業の時とは違うものをたくさん学び、吸収できるのですごく充実しています。

夏に行われるSHOWCASEは一年生が初めて舞台に立つイベントです。このクラスで一緒に作品を作る最初で最後の機会。まだ始めたばかりのコンテンポラリーダンスをベースにどのような作品に仕上がっていくかすごく楽しみです。3年生の先輩方が振り付けしてくださる想いを精一杯表現できるように毎日の授業を初め、本番まで頑張りたいと思います。

佐々木　椋子（1年）A3クラス

授業も始まり、日本女子体育大学に入学した実感が徐々に湧いてきました。毎日身体と踊りと向き合う日々が続いていくのだと思うと胸が高鳴ります！

これから先、一緒に踊ったり、作品を作ったり、考えたり、仲間あるいは同志とも言える周りの方々を巻き込んで活動していくことになります。そのような中、舞踊を愛する者同士といえど、バックグラウンドが異なれば考え方や当たり前だと思っていることも異なり、時にはぶつかることもあるかもしれません。しかし、それは新しい価値観や考え方を知る良い機会です。もちろん座学で知識を蓄えること、実技で身体を磨いていくことも大切ですが、何気ないところで新しい価値観や考え方を発見することも大切だと考えています。自分の強い信念を持つべきところと広い心を持って何でも受け入れるべきところの匙加減をよく見極めて、大好きな舞踊の道を突き進んでいきたいです。

「大学」で舞踊を学ぶ以上は、4年間ただ踊るだけでは終わらせない、周囲の方々との信頼関係やスケジュールや体調の自己管理、そして教養など踊るために必要な踊り以外のことも大切にして、伸び代さえも自分で作ってしまえる程の努力を重ねていきたいと思います。

煤孫　ゆめの（1年）B1クラス

今まで趣味として続けてきたダンスを仕事として生涯踊り続けていきたい、自分のものにするためにただ踊るだけでなく学問として学びたいと思い、日本女子体育大学の舞踊学専攻に進学しました。入学して一週間が経ちましたが、毎日が新鮮で、とても楽しい日々を送っています。ニチジョの良いところはというと、首都圏だけでなく、日本のあらゆるところから来ていること、そしてその子たちはみんな自分と一緒でダンスが好きなのだと思うととても不思議な気持ちになります。いろんなジャンル、いろんなレベルの子たちが同じ教室で実技の授業を受けているのはちょっと面白いです。

私は小さいころからジャズダンスしか習ってこなかったのですが、ここニチジョに入って、これからクラシックバレエやコンテンポラリーダンスなどの新しいジャンルを学べることにとてもワクワクしています。やったことないからできないのは当たり前で、できなくても恥ずかしがらずにいろんなことにチャレンジしようと思います。この四年間が無駄にならないように、卒業した後楽しかったなあと思えるように、大学生活を続けながら自分の夢に近づけるように、精一杯日々を過ごしていきたいです。

中里　芽衣（1年）B2クラス

ずっと憧れていた日本女子体育大学の舞踊学専攻に入学して、2週間が経ちました。私は、ダンスのもっている素晴らしい力について深く学びたいと思いこの大学に入りました。そんなダンスのことや、踊り手の身体作りのことなど、毎日ダンスに関わる大切な授業があり、とても充実した日々を送っています。何もかもが新鮮で、ワクワクがとまりません。この胸の気持ちを持ち続けてこれからも１つ１つの授業に参加していきます。

B2は、ノリが良く個性的で何かを話していてもダンスになっていくような即興性にあふれた楽しいクラスです。みんなで創り上げていく1年生の初舞台、SHOWCASEへの想いは熱く、日に日にみんなの気持ちが１つになっていくのを感じます。

これからも、互いに高め合い 刺激し合い 助け合いができる仲間を大切に過ごしていきたいです。そして、日女に入った意味を忘れず4年間で沢山のことを吸収し、ダンスの素晴らしい力を発信していけるようなダンサーを目指して全力で頑張ります。

松本　真里奈（1年）B3クラス

日本女子体育大学に入学し、約二週間が経ちました。今年は桜の開花が遅くちょうど入学式を迎えるころ、私たちを歓迎するかのように満開に咲き誇りました。

私は高校時代、大学でダンスを専門的に学ぶか、日本文学を研究する道に行くかとても悩みました。どちらも好きだったため最終的に舞踊・体育系大学は日女の1校だけ受験し、文系大学を数校受験するという選択をしました。結果、文系大学の第一志望にも合格しましたが、日女に合格したことがわかってからは日女に行きたいという気持ちが強くなり、入学を決めました。

日女での毎日は予想していた以上に大変で身体的にも精神的にも負担がかかります。授業についていくだけでも必死ですし、周りのレベルの高さから感じるプレッシャーや自分の限界と戦う毎日です。しかし、舞踊や身体のことについて学び、この環境で踊れていることに大きな喜びも感じています。また、自分でこの道を選んだからには楽な道を選ばず、責任もって日々ダンスに取り組みたいと思っています。

私が所属しているB3クラスは優しく、楽しく、個性的な面々が揃っています。これから夏のSHOWCASEに向け本格的な練習が始まりますが、このメンバーでならつらいことも乗り越え舞台を成功させることができると確信しています。

4年後、笑顔で卒業し、また桜を見ることができるよう、努力を惜しまず全力で毎日を過ごしたいと思います！

高山　笑菜（4年）石川研究室

4月に研究室が始まったときから、私たちは3年生パフォーマンスに向けて話し合いをしたり、レッスンしたりしてきました。

各自が表現したいと思うイメージを持ちより、話し合いを重ねてみんなの納得のいくコンセプト・曲を決め練習に入りました。

練習の過程で難しいと感じたのは、18人でひとつの作品を創り上げていかなくてはいけないということでした。たくさんぶつかり、このままじゃダメだということで、時間を設けて、全員で本音で言い合ったことがありました。その時、各々忙しい中でも、少しづつ歩み寄っていかなくてはいけないことに気が付きました。その日から、石川研究室の団結力は高まり、みんなの気持ちがひとつの方向へ向きました。

本番は、全員が「最高に楽しかった！」と言って終えることができました。

3年生パフォーマンスを通して、研究室全体として、とても良い関係性が築けたと思います！

佃　香里（4年）岩淵研究室

今回の3年生パフォーマンスでは、私たち岩淵研究室は２グループに分かれて作品創作を行い、２作品を発表しました。私のグループは、現代社会の人々の無関心をテーマにした「a crowd of people stood and stead」という作品を創りました。この作品は身体運動そのものの面白さが作品の内容というよりも、身体運動によって享受されるテーマが重要な作品であったため、創作期間中はテーマを汲み取って身体表現に起こすことの難しさを実感しました。

今回研究室から２作品を発表し、同じコンテンポラリーダンスを扱う研究室であっても、作品のテーマやアプローチの仕方、創作の進め方によって、全く異なる2作品ができ上がりました。私は、コンテンポラリーダンスというものは、既存のテクニックから逸脱して新しい動きを追求していくものであり、だからこそ振付者の個性が最も表れるダンスであると思っています。今回同じ研究室から異なる作品を制作できたことは、そのようなコンテンポラリーダンスの特徴を提示できたということではないだろうかと思います。

また３年生パフォーマンスという舞台を無事に終えることができ、舞台を支えてくださった先生方やスタッフに感謝申し上げたいと思います。

正課活動

浜原　安菜（4年）舞踊学専攻　卒論発表会

舞踊学専攻の卒論発表会を経験するのも今回で3回目となりました。1年生のころは内容についていくのがやっとでしたが、今回は運営側としての仕事もあり、いよいよ発表する側になるという実感がわいてきました。発表者の方々は、それぞれ専門に扱っていた内容を5分間にまとめており、どれも今までの研究が凝縮された濃いものでした。教育や文献などを基本の軸として、舞踊のいろいろな側面を知ることのできるこの発表会は、本当に貴重な機会でした。中には舞踊と関係のない内容を取り扱っている方も居ましたが、自分の知らない分野についての発表は面白く、新たな知識として私の中に残していきたいと思いました。その中でも特に、一つのことを徹底的に研究していた方の発表は素晴らしかったです。私自身も、研究している内容に対して定義づけのところからもう一度見直していこうと考えました。 一番初めの段階だからこそ、一番丁寧に取り扱うべきだと感じましたし、その定義に対しては揺るがず誠実でありたいと思いました。そして、様々な視点から切り込んでいき、徹底的な研究をしていきたいと思います。

3年生パフォーマンス

芝田　和（3年）舞台監督

3年生パフォーマンスは4年時に行われる私たちの大学生活の集大成、卒業公演の次に大切なものです。その舞台を支えるのは1・2年生の学生スタッフです。私は今年舞台監督をやらせて頂きました。舞台監督は他のスタッフとは違い、全体を見て混乱が起きないように見定めて指示を出さなくてはいけません。今までは先輩方がいたスタッフで、従って動いていればなんとか舞台が成り立っていましたが、いざ、自分が1番上に立ち、舞台を支えるとなると、今まで何をやっていたんだろうというほど、わからなくなることが多々ありましたが、無事に終えることができたのは周りのスタッフの協力、先生方、助手の先生方の協力があったからです。

改めて舞台はスタッフの力がないと成り立つものではないと感じることができました。自分が舞台に立つというときはその経験をしっかり生かすことができます。この大学に入ったからには一度は、舞台スタッフを経験することを私はお勧めします。